

自由南アフリカの声

Voice of Free South Africa

2009年2月

No. 49

～1冊の本が人生を変える～

発行 / アジア・アフリカと共に歩む会

Together with Africa and Asia Association(TAAA)



2009年2月までの報告と予定

- 9月～12月 インドウェドウェ地区 菜園・図書指導 20校訪問
- 9月 英語の本15964冊と算数セットなどが南アに到着
- 10月 グローバル・フェスタ2008に出展
- 10月 学校菜園プロジェクト教師研修
- 10月～11月 学校に果樹や南ア固有の木の苗を植える
- 11月～12月 ELETにて本の整理
- 1月 朝日新聞にTAAAの南アの活動が報道される
- 1月 TAAA南ア帰国報告会

目次

TAAAの南アフリカにおける活動報告(平林薫)	2
ぐりとぐら ～そらいろのたね～ (西村裕子)	5
TAAAと学習院高等科 (米山周作)	6
派遣村考・これは日本のアパルトヘイトではないか (下谷房道/久我祐子)	8
NPO生活自立サポートセンター・もやいの紹介	9
TAAAと私 第10回 (野田千香子)	10
主な活動・ルイボスティ	11
寄付・会費・本などを下さった方々	12



2009年1月11日帰国報告会にてTAAA南ア事務所代表平林薫

TAAA の南アフリカにおける活動報告

TAAA 南ア事務所代表 平林 薫

ンドウェドウェ地域の学校農園プロジェクト

2007年6月から始めたンドウェドウェ地域の学校農園プロジェクトは、2009年3月末で JICA の草の根支援事業としては終了します。しかし、プロジェクトの最終目標は、学校が自主的に農園を維持・発展させ、菜園活動がコミュニティーへ普及していくことです。TAAA は終了後も現地の NGO である ELET と協力体制をとり、地域の自立を助けるために、アドバイスやモニタリング等のフォローアップを積極的に行っていきます。以下は2008年10月1日から12月31日までの活動内容をまとめたものです。



今期は豊作！おいしい野菜がたっぷり採れました

エンブエニ小学校の子どもたち

ELET との協力体制がよく、学校の教師たちが積極的に取り組んでいるおかげで、プロジェクト対象校 20 校すべてが優れた成果を見せています。また、自らの希望で新たに3校がプロジェクトに加わりました。収穫から種を採り、保存し、新たに植え付けるという、小規模農園ならではのサイクルで野菜作りが進んでいます。今期は十分な雨があったため、野菜がよく生長しました。ハウレン草、ピーマン、キャベツ、チリなどの収穫物を学校からいただいたところ、新鮮さはもちろん、味が濃く格別においしかったです。改めて、農業のポテンシャルの高い地域なのだなと感じました。

菜園技術は、2008年3月にリンポポ州の JVC プロジェクトで学んだパーマカルチャーを実践していますが、これに基づいて各校はそれぞれの創意工夫で独自のやり方を定着させてきています。巡回訪問時にそれぞれの学校がかかえる課題や必要なサポートについて聞いてまわりました。学校ごとに、担当教師とゆっくりと話しをして、困っていることや必要なものなどを聞き、次の訪問までにはできる限りの対応をすることで、相互の信頼関係を築くように努力しました。教師を励まし、前向きな気持ちにさせることがプロジェクトマネージャーの役割だということを感じています。土から野菜の芽がほんの少しのぞかせたなど、どんな小さな成果でも見つけ出し褒めたたえて勇気づけてきました。

学校が自主的に動き出し、コミュニティーへ普及する

新たに3校から活動への参加依頼を受けたことから、少しずつ地域に菜園が普及してきていることを感じています。3校へは、基本的な農具と種を配布し、野菜の育て方を指導しました。1校はすでに地域住民が率先して活動に参加し、苗も地域の家庭に配布しているとのこと。もう1校は高校で、地域の家庭は貧しくて、高校には給食制度もないために食事を十分に取れない生徒が多いとのこと。校長は「まず生徒たちに食べさせること、生徒たちが技術を習得すること、そして彼らが家庭や地域で農業を始めることを促進するためにこのプロジェクトに参加した」と話していました。

プロジェクトを開始してから暫くは、どの学校も地域住民の協力を得るのは難しかったのですが、実際に野菜が収穫されるようになり、給食が改善されるなど成果が目に見えてくるようになるにつれ、地域住民はプロジェクトを認知・評価し、積極的な関わりが見られるようになりました。昨年のクリスマス休暇中は「地域住民のサポートが得られないので菜園の世話をどうしたらいいか」と心配する声が多かったのですが、今年は担当教師たちも生徒たちも、地域住民も「自分たちの畑」として休暇中も世話をすると張り切っていました。

プロジェクト対象校のムチャトゥ小学校では、生徒の親から依頼があり、学校菜園で野菜作りの技術指導を行いました。その後、学校周辺の家庭で野菜作りが始まっています。学校の菜園で採れた野菜を学校に持ってきて見せた生徒もいます。



左：作業着がなく、ネクタイ・黒靴のまま作業をしています。

このように、学校が自主的に動き始めており、コミュニティに菜園活動が着実に根付きはじめています。すでに独自に種を購入してどんどん菜園を広げている学校も出てきています。

教師研修が奏功する

今まで教師研修を頻繁に開催してきたことで、学校間の交流が活発になり、お互いにいい意味でライバル意識をもち刺激し合うようになってきています。今期は10月に教師研修をしたところ、18校から20名の教師が参加しました。農業指導員が収穫後の種の採り方を詳しく指導し、その後グループ討議が行われました。活動の中で重要な点の再認識や、問題点、改善案、解決策など、それぞ

れのグループから発表してもらいました。お互いノウハウを学び合い、意見交換も活発になってきています。プロジェクト終了後に向けて、教師たちのネットワーク作りが始まっています。学校間のネットワーク構築は、今後の種や苗の入手や、何かあった時の問題解決のために非常に大切です。このように教師研修は、ただ単に教師たちが農業の知識を得るだけでなく、学校間の交流作りや教師たちの主体性を高めるのに非常に効果的でした。

野菜入りの給食からビタミンが採れる。課題はタンパク質

各校では十分な収穫があがり、給食にふんだんに使われました。これにより野菜不足だった旧来の給食が栄養面でかなり改善されました。余った収穫物は、困窮家庭の生徒に持ち帰らせています。

研修会でプロジェクトマネージャーは、日本の小学校給食の献立を紹介し、栄養のバランスのいい食事の重要性を説明しました。日本の栄養の優れた献立を見て、教師たちはため息をついていました。野菜はビタミン強化に役立ちましたが、給食の恒常的なタンパク質不足が懸念されます。国から支給される給食費では、肉類はもちろんのこと牛乳や卵を購入することさえ難しいので、生徒たちは著しくタンパク質不足におちいつています。当分は、豆類の収穫でタンパク質を補っていくことになります。植樹プロジェクトで、果物ではタンパク質を多く含むアボカドの木を各校2本ずつ植樹しました。

美化意識の向上

研修では、栄養だけでなく、食事のマナーやゴミのポイ捨て問題などを話し合いました。生徒たちが歩きながら給食を食べたりしている点を指摘しました。校内にゴミ箱が設置されていないので、生徒たちはゴミを投げ捨てる問題があります。大人たちもポイ捨ての習慣があるために、これは一朝一夕に解決できる問題ではありません。まず、地域社会の大人たちから態度を改めていくべきでしょう。

生徒たちの間で、校内の清掃、トイレ掃除、菜園の世話は当番制で行われるようになってきています。ゴミの問題はあるものの、プロジェクトが始まった時と比べると、明らかに学校はきれいになってきており、生徒たちの美化意識も向上してきています。

農業が大好きな生徒たち

「自然科学」の時間に、菜園に出て植物の生長を観察するなど、菜園プロジェクトは授業にも積極的に活用されています。

学校には課外活動がほとんどないので、生徒たちは放課後に菜園活動を楽しんでやっています。どの学校にも農業が大好きで、目立って作業の上手い生徒がいます。勉強が遅れ気味で引っ込み思案であったのが、大好きな菜園活動を通して自信を得て積極的になった生徒もいます。そういう子どもたちのためにも、このプロジェクトが、将来的には農業指導者などの職業の選択肢に繋がれば幸いです。

右：女子の仕事とされていた水汲みを男の子もするようになりました。



植樹活動について

埼玉県さいたま国際協力基金をいただき、昨年10月より植樹活動を行っています。まずドウェドウェ地域の23校に、土地固有の木とバナナ、マンゴー、オレンジなどの果樹をあわせて23本ずつ植樹しました。敷地内には教室があるだけの殺風景な学校が多いため、土地固有の木をフェンスの周りに植え、成長した際には日陰ができるようにしました。また、果樹は野菜畑の周り、もしくは中に植えられて、数年後にはおいしい果実をつけることでしょう。



学校に木が届くと、教師や生徒たち

は大喜びで、低学年の生徒たちも木を受け取りたくて駆け寄ってきました。学校によっては岩のような土地を掘り起こす大変な重労働でしたが、特に男子生徒たちががんばってくれました。学校での植樹を見ていた地域住民からも“オレンジの木が欲しいのだけど”というリクエストをもらい、すべての学校への配布後に寄贈を行いました。環境保護と実用性を兼ね備えた、土地固有の木や果樹の植樹は地域にとって大変効果的な活動だと感じました。

図書活動について

昨年9月末にダーバンに到着した290箱の本は、通関に少し時間がかかり、10月末にELETオフィスに運び込まれました。その後、箱を開けてプライマリー（小学校）用、セカンダリー（中、高校）用に仕分けを行い、1月中旬の新学年開始以降、配布が行われます。TAAAが行っている本や本棚の寄贈の話を聞いて、各地の学校から問い合わせが来るようになっており、すでに何校も配布を待っています。遠隔地や黒人居住区では、まだ図書室が設置されていない学校が多く、本をもらっても収納場所がないため、本を配布する際に1台でも本棚の寄贈を行えればと

考えています。前年度の本は、まずドウェドウェ地域の小学校20校に配布され、その後各地域の学校に配布後、専門書などはウグ郡にある州教育省のリソースセンターに寄贈されました。同センターではTAAAから寄贈された移動図書館バスが学校巡回を始めたところで、近いうち視察に行く予定です。昨年ELET宛に送られた移動図書館バスは、現在、運輸省への輸入車のナンバー登録を



左：マンザンショベ小学校

行っているところで、ナンバーが取れ次第、学校巡回を開始する予定です。TAAA から寄贈の本と本棚を使って、空いている教室を図書室にしたエマクルセニ小では、各学年が授業で読書を行えるようになりました。まだまだ本の数や種類は十分ではありませんが、生徒たちが本に触れることができるようになったのは大きな一歩です。これからも生徒たちが様々なジャンルの本に接して、世界を広げていくことができるよう応援していきたいと思っています。



マゴンゴロ小学校の図書室 まだ本棚がガラガラです。

昨年 TAAA のプロジェクトとして行なった、「ぐりとぐら」の絵本のズールー語翻訳版が到着し、いよいよ学校に配布されることとなります。さて、生徒たちの反応は？ 移動図書館車の活躍と共に、会報 50 号でご報告いたします。

「ぐりとぐら ～そらいろのたね～」 収集のご協力をお願いいたします 西村裕子

ズールー語に翻訳し、昨年送付した「ぐりとぐら」の本は20冊。学校数や子供たちの数と比較して、まだまだ足りません。

きれいな色・可愛いらしい絵、大人になってからも、ずっと昔に読んだ絵本の楽しい思い出、誰にもありますね。

南アの子供たちにも、絵本の思い出を作ってもらいたいですね。これからも、TAAAでは「ぐりとぐら」の本をズールー語に翻訳して届けたいと思います。

皆さんの本棚に、「そらいろのたね」や「ぐりとぐら」がありましたら是非、ご協力をお願いいたします。



昨年夏の作業のひとコマ。
浦和学院高校の生徒さん達が、作業に参加して下さり、とても能率が上がり、助かっています。
昨年秋の文化祭では、TAAAの活動が書かれた模造紙を掲示してくださいました。

TAAA と学習院高等科

米山 周作 (TAAA 会員)

2006 年夏、TAAA の全面的サポートによって夢だった南ア訪問が実現し、一生涯忘れられない貴重な 19 日間を過ごしました。地域に密着した地道な NGO 活動、現地の人々との出逢いと触れた温かさ、そして南ア社会の実態。わずかな滞在ながら、得たものを思い出だけでは絶対終わらせられない、この経験を高校教師としてどう日本の教育現場に還元できるか、帰国直後の余韻に浸りながら思いを馳せていました。

1. 学園祭でのチャリティー販売

2006 年秋。それまで学習院高等科の学園祭では、チャリティーをも含む一切の販売行為を行っていませんでしたが、生徒達から、「食育」に絡めた食品を販売し、その収益を慈善団体に寄付したいという強い要望が出されました。11 月の学園祭当日には、初の食品販売を通して実に¥114,766 の収益金が生まれ、偶然にも（幸運にも）私が学園祭の顧問をしていたので、生徒達からどこに寄付をしたらいいかとの相談を受けました。生徒達は大手国連機関を提案していましたが、「現金だけ寄付してそれで終わり」よりも、「現金がどう現地で役立っているかを追うことができる」方がいいのでは？と持ち掛け、



NGO への寄付という選択肢を紹介したところ、2 つ返事で OK、TAAA への寄付が実現しました。平林さんが一時帰国した 12 月、南アの教育支援に役立てて欲しいという生徒一同の願いを込めて、収益金を直接手渡させていただきました。

このお金は平林さんを通して、ダーバン近郊のマンドシ小学校に図書室開設資金として寄付され、本棚等が購入されました。校長先生からも礼状が届き、子ども達は感謝を著すポスターまで描いてくれました（写真左）。

2. 学園祭での展示

学園祭でのチャリティー販売は翌 2007 年、そして昨年 2008 年も継続することとなり、ここ 3 年間 TAAA に寄付を続けることができました。2007 年の収益金¥100,355 は、さらに 4 つの小学校（シゲドレニ小、ゴゴウマ小、インシャンガニソ小、エマクルセニ小）の図書室資金として寄付され、2008 年の収益金¥164,152 はムジャレ高校の図書室整備に充てられる予定です。一昨年、昨年と、生徒達がそれまでの寄付の成果と TAAA の紹介を 1 枚のポスターにまとめ上げ、学園祭当日、販売店舗の横に展示しました。平林さんに撮っていただいた寄付先の図書室の写真と、生徒達がホームページで調べた TAAA の活動を紹介（写真左が 2007、右が 2008 のもの）。来場者が必ず通る正面玄関前に置けたので、足を止めて熱心に読んでくれた人達もいました。



寄付を始めた年に1年生だった生徒達が昨年は3年生となり、この春に卒業します。TAAAへの寄付を始めて3年。学校事情によって来年度以降もチャリティー販売を継続できるかどうか分からなくなり、1つの区切りになるかも知れないと野田さんに相談したところ、生徒達にこれまでの功績を称して感謝状を授与していただきました。現3年生達は、チャリティー販売を担ってきた現在大学生の先輩達に、この感謝状の写真を撮って送ったそうです。サッカー好きの彼らですから、来年のW杯開催時には、このささやかな国際貢献をきっと思い出してくれることでしょう。

3. 「国際理解・国際協力入門」

2006年の南ア訪問を機に国際協力の裾野を少しでも広げたいと思い、高2生対象の選択科目として、「国際理解・国際協力入門」という授業を2008年4月に立ち上げました。どのくらいの生徒が集まるのか不安でしたが、定員の15名をはるかに上回る人数が応募し、抽選で生徒が決まるほどの盛況振りでした。「グローバル化の裏側」をテーマとして募集して、ここまで生徒が集まるということに、「次世代も捨てたものじゃない」と強い責任感を感じたものです。この授業の一環として、平林さんの一時帰国に合わせて2008年7月1日に平林さんをお招きし、生徒達にご講演をいただきました(写真下)。移動図書館車や学校農園の写真も交えて90分ご講演いただき、その後に質疑応答となりました。2010年のW杯開催国という認識しか持っていなかった生徒達も、それ以上の問題意識を持ってくれたようです。以下、生徒達が綴った講演の感想です(生徒達の了承を得て掲載)。

- ・(自分で南アの治安について調べ、)人間を殺すことに抵抗を持たない人間というのは、道德教育の欠如によるものだろう。
- ・本人達も別に犯罪をしたくてしているわけではない。犯罪者自身にも責任はあるが、教育をしようとしなかった側にも責任はある。
- ・本当にアフリカを変えようとするならば、歴史的に現場を見ていかなければならない。
- ・平林さんの話の中で最も印象に残ったのは、(支援する側とされる側が互いに学び合う)「双方向」という言葉。
- ・教育に格差があってはならない。
- ・自分を考え、どこまで異文化と共生するのか。それは我々日本人にも言えること。
- ・南アは11ヶ国語の多言語社会であり、そのことで、国全体を1つの教育でまとめるのは難しいのではないか。言語は、国以前に人を繋げるコミュニケーション・ツール。母国語(ズールー語)をやるのか、それとも現代の社会で使われる英語をやるのか、どちらとも言えない難しい問題を抱えている。
- ・W杯開催に向けて国全体が盛り上がっているのはいいが、閉幕後の南アが心配だ。



私自身がTAAAに関わって3年。一教員として自分の環境の中でできることはやってきたつもりですが、まだまだ夢は膨らみます。前述の通り、昨年の学園祭の収益金は同世代のムジャレ高校に寄付されます。学習院高等科生による「一方通行」の支援に終わらせず、「双方向」の交流を今後どのように実現させ、継続的に付き合いを保っていくか、自分に課せられた使命だと感じています。TAAAでも議論を交わしてきた通り、W杯開催は若者達の関心をアフリカに向けさせる大きな契機となることでしょう。高校教師として、このイベントをどう教室で「調理」していくべきか、しっかり考えていきたいと思っています。

派遣村考

下谷 房道

1月2日の夕暮れ近く、日比谷公園内に設置された派遣村に行った。正月気分に含まれた日本の首都、その一角に現れたテントの群れ。私は反射的に南アフリカで見た黒人居住区を思い出してしまった。安易な比喩は慎まなくてはならないが、これでは日本のアパルトヘイトではないか。

今の日本は、労働者の非正規雇用は34%、すでに三人に一人を越えている。生活保護世帯は100万を越え、自殺者も1998年から3万人の大台にはね上がっている。毎日少しずつの変化には気づきにくいものだ。派遣村の出現は今の日本の姿を目に見える形で象徴的に提示してくれた。人間は使い捨てカイロではないのだ。働く事を通して社会貢献をすることは人間の尊厳に関わる。

アパルトヘイト時代の白人は、一部の人を除いて差別や格差の事実に対して無知であったり、無関心であった。そして差別や格差の構造によって守られる経済的な利益を容易に手放そうとしなかった。人種差別は特殊な偏見だけが問題だったのではないことを確認しておきたい。私たちは派遣村の出現をきっかけに自分の生活、自分達の社会のありかたを再吟味する機会を与えられた。1964年秋、歴史学者の上原専祿氏は「南アフリカの黒人たちの自由と解放は、私たち日本人の自由と解放の問題でもあるのです。そのことを考え続けてみたらよいでしょう。」とのべられたという。（『アパルトヘイトと日本』楠原彰氏）この言葉がまた違った味わいを持って思い出されてくる。

私の勤務している高校でも就職活動は厳しいものがある。内定取り消しは今のところないが、まだ内定を手にすることができずに活動している生徒は少なくはない。授業料の滞納などなどの教育の諸問題を思い返しても南アフリカとの相似が気になる2009年の年のはじめであった。



1月3日 日比谷公園派遣村 毎日新聞 工藤哲氏撮影

これは日本のアパルトヘイトではないか

久我 祐子

1月2日に派遣村を訪れた下谷さんからのメールに背中を押されて、私も4日に派遣村にボランティアにいつてきました。丁度忙しい時間帯に当たったのか、入村するやいなや、ゴミ拾い、皿洗い、食事の準備と待たなしで色々な仕事が回ってきました。村は、テントの群れ、配給の長蛇の列、厳寒の中の簡易治療室などまさに生存問題までいきついてしまった現代の日本の貧困を象徴していました。ネットカフェ暮らしや野宿で体をこわし医療相談をうける人たちの中には、重症患者もいたそうです。

1995年日経連（現・日本経済団体連合会）が発表した「新時代の日本的経営」の中に、企業の雇用形態を「長期蓄積能力活用型」、「高度専門能力活用型」、「雇用柔軟型」に分ける、というのがありました。従来の長期雇用が守られるのは「長期蓄積能力活用型」のみで、後は非正規に任せ人件費を軽減させるというものです。非熟練労働者が担う「雇用柔軟型」は、派遣社員やフリーターの間で「生死柔軟型」と揶揄されていると聞きますが、派遣村の光景を見て、まさにその通りだと思いました。毎年3万人を超える自殺者の1/3は生活苦が原因だとのこと（「反貧困」湯浅誠著 岩波新書）。日本の経済界のリーダーや政治家たちは、何かと「国際競争力」を持ち出し、労働市場の柔軟性を強調します。それが必要ならば、なぜ、行政はしっかりとしたセーフティーネットを貼らないのでしょうか。日本の経済は、今やこれほど多くの非正規労働者によって支えられているのです。当然、今回のような不景気による、大規模な非正規リストラは想定外ではなかったはずですが。しかし、日本の貧困問題は、今回の不景気に始まったことではなく、構造上の問題で、2002年以降の景気回復期から貧困が広がって

自由南アフリカの声 49号

いることは、以下のように具体的に多くの経済アナリストたちが指摘しています。

「日本では2002年1月から景気回復が始まり、名目GDPが14兆円増える一方、雇用者報酬は5兆円減った。だが、大企業の役員報酬は一人当たり5年間で84%も増えている。また、株式への配当は2.6倍になっている。ということは、パイが増える中で、人件費を抑制して、株主と大企業の役員だけが手取りを増やしたのだ」（経済アナリスト 森永卓郎 日経BP社コラム「SAFETY JAPAN」第67回 2007年1月29日）

そして、今回のように不景気になると、痛みは、生存問題にかかわるほどに、弱い立場の労働者がかぶっているのです。

アパルトヘイト時代の南アフリカでは、法の下に、国民の大多数を構成する黒人の人権は奪われ、貧困に追いやられていました。労働問題はまさに、生存問題でした。国際社会の非難を振り切り、長いことアパルトヘイトは死守されてきました。そして今でもこの悪法の負の遺産が様々な形で社会、国民を苦しめています。

一方、日本には、国民の生活を保障する憲法25条があります。

1. すべて国民は、健康的で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。
2. 国は、全ての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。

このような素晴らしい憲法が、しっかりと守られず、劣化する労働環境と不備なセイフティーネットにより、困窮者を増やし貧困を広げている経済大国日本。そして南アと同様、一番の犠牲者は子ども達ではないでしょうか。

今、日本は岐路に立っているのではないのでしょうか。国内外の貧困、差別にNOといたい市民の一人一人の少しの勇気と行動が今こそ必要だと思います。様々なNGOや市民団体のそれぞれの活動範囲を超えた緩やかな連帯に私は希望を感じます。

[NPO 生活自立支援サポートセンター・もやい] (<http://www.moyai.net>) のご紹介

〈もやい〉は、2001年設立。“すべての人々が安心して暮らせる社会をつくる”を合言葉に集う、多くのボランティアで構成されているNGO法人です。日比谷公園の派遣村では中核的な役割を果たしました。主な活動をご紹介します

- ホームレス状況にある方に必要なアパート入居の連帯保証人提供。社会復帰をサポート。
- 入居後の安否確認
- もやいホットライン：専門家と連携しながら、入居後の様々な問題の相談に応じる。
 - 法律：借金、不動産賃貸の相談
 - 福祉：生活保護や公営住宅、介護、年金、税金などの相談
 - 労働：賃金に関する相談、労災、職業病などに関する相談
 - 医療：心身の悩みに関する相談
- 生活保護申請サポート：福祉事務所への申請のサポート
- 生活支援物資支給：緊急時には米などの生活物資の支給
- 心の安らぎのための食事会、交流サロン・カフェ、専門家による学習会実施
- 行政への的確な提言：路上生活者の実態を調査、適宜、行政に当事者の立場から提言。

★郵便振替口座 00160-7-37247 口座名： 自立生活サポートセンター・もやい
正会員年一口1万円/サポーター会員年会費一口 5000円/資金カンパは通信欄に明記のこと。

TAAA 支援者の皆さま 心を痛めながら、どう支援していいのかわからないと思っていらっしゃるかたは、〈もやい〉へ資金援助をされてはいかがでしょうか。 (野田千香子)

TAAAと私

第9回(1996年) 野田千香子

移動図書館ベース落成式

1996年11月、南アのヨハネスブルグから30kmのベノニ市郊外のデベトンの移動図書館ガレージ兼書庫(図書館ベース)の落成式が行われた。デベトンは当時50万人の黒人の人たちが住む地域であった。ガレージはデベトン小学校の敷地内に日本のボランティア貯金助成金で、現地の大工さんが建設した。この落成式に TAAA から、久我祐子さんと古我貞夫さんと私の3人が出席した。

2年前に訪ねたなつかしいデベトン小学校に到着すると広々した敷地に立派なレンガづくりの高い建物が目に入った。そしてその中に、「松の木号」と日本語で書かれたバスが収まっていた。この時点で埼玉県内で10年以上使われて廃車となった移動図書館であったが、それから13年になろうとしている今も、20~30校を巡回し、デベトン地域の生徒や先生方に多いに役立っている。建物内の書庫には梯子を使う高い本棚がぎっしり並び、かなりの本が分類されて貸出を待っていた。

レンガのガレージを建てた地元の建設業の若い黒人の社長さんが抱っこしていた目のくりくりした坊やも今では中学生になって移動図書館の本を利用していることだろう。

講堂や体育館のない黒人居住区の学校ではどこでも、中庭に椅子を運んできて、ぎっしり座り、教室の外側に廊下代わりに作られているベランダをステージとして、学校行事が行われる。この日も教室の外に作られたコンクリートのベランダに、私たちははじめ、移動図書館の運行を実施する現地のNGO の代表ベントレイさんや校長先生たちや教育委員会の人たちが並んだ。生徒は中庭に立錐の余地もなくぎっしり座って目を輝かしている。

生徒の代表たちがベランダに上がり、すばらしいコーラス(アカペラ)を聞かせてくれた。これまでに私は何十校も学校を訪ね、そのたびに伴奏なしの生徒たちのコーラスで歓迎されてきたが、そのたびにあまりの美しさに目がうるんでしまう。

私も壇上で何か挨拶するよう促されたので、下手な英語で移動図書館が実現した喜びを語り、

「あなた方の幸せは私たちの幸せでもあります」というようなことを言ったと思う。

クワズールーナタール州のンドウエドウェへ

このあと、国内便でダーバンに移動し、もう1台の小さい移動図書館車や本を送ってある現地のNGOであるELETを訪ねた。ELETには私たちが送り出した段ボール入りの英語の本がたくさん、到着して所狭しと机の上にも並べてあった。私たちはELETの職員と一緒に分類の手伝いをした。いつもファックスなどでやり取りしていたELETのスタッフと仕事できるのは、至上の喜びであった。

ダーバンから百キロ離れたンドウエドウェの田舎にでかけた。小さな丸屋根の家が丘のあちこちに点在している。そんな小さな丘の連なりの中突然小・中学校が現れる。このンウエドウェで7年後から、JICAの草の根技術協力支援事業で、HIVピア教育や学校農園のプロジェクトを行うとはこの時は思いもしなかった。雑草が細々と生えるだけの丘陵地帯であった。(つづく)



上: ガレージ兼書庫の前でテープを切るベントレイさんと野田

下: ガレージに入った移動図書館車、左側の部屋が書庫



◆ 主な活動 (2008年9月16日～2009年1月15日) 下線は南アにおける活動

9/16-22 南アドウエドウェ学校訪問 平林薫

9/16 HP 更新 武山理絵
 9/19 彩の国国際協力基金受領 果樹など植樹事業
 9/19 浦和学院高校の小林志奈先生に文化祭展示物を渡す 野田
 9/20 ～ 会報48号編集校正 野田千香子 西村裕子

9/23 文化遺産の日イベント出席 (トンガート市庁舎にて) 平林

9/24 助成金申請書提出 平林薫 野田

9/25 JICA 報告書、証書類を DHL で発送 平林

9/25 会報封筒準備 大久保ふみ 野田
 9/26 南ア・移動図書館活動まとめ 久我祐子
 9/29 Lush より赤羽真紀子さん来訪 野田

9/30 ムジェレ高校ムソミ校長とミーティング 平林

10/3 浦和コミュニティセンターへ会場申し込み 野田
 10/3 フェスタ案内印刷へ国際交流協会 野田
 10/3～4 浦和学院高校文化祭に TAAA 展示
 10/4～5 グローバルフェスタ2008(日比谷公園)に出席
 下谷房道 西村 佐々木佳世子 中野敦子 山下八千穂
 久我 浅見克則 野田 フェスタで発表 久我

10/6 ELETにてミーティング 平林

10/7-8 ドウエドウェ学校訪問 平林

10/7 JICA にて打ち合わせ会議 久我 野田
 10/11 会報48号発送作業 西村 丸岡晶 野田
 小林志奈さん

10/13 HP 更新 武山

10/13 1月の報告会案内作成 丸岡 野田

10/14 学校菜園プロジェクト教師研修開催 平林

10/15 ELETにてミーティング 平林

10/15 HP 更新(会報48号) 近藤信幸

10/17 南アへ送金 野田

10/18 千葉アシアーンで TAAA 講座 久我

10/10～21 助成金申込等準備 平林 野田

10/20～29 ドウエドウェ学校訪問 平林

10/31 LUSH 助成金受領

11/1～2 学習院高等科チャリティ販売・展示 米山

11/3 ELETにてミーティング 平林

11/4-5 ドウエドウェ学校訪問 平林

11/10～12 ドウエドウェ学校訪問 平林

11/12 会計今年度前半集計 西村

11/14-17 ELETにて本の整理 平林

11/16 梱包作業と会議 西村 野田 浅見 下谷 山下
 北爪健一 五十嵐瑛里 上林潤子 浦和学院高校より
 塚田慧美 田中真悠 鶴殿晶代 垣内夕祈
 教具会社より車2台分の文具の寄贈を受ける

11/18-19 ドウエドウェ学校訪問 平林

11/21 ELETにて本の整理 平林

11/24～26 ドウエドウェ学校訪問 平林

11/26 JANIC 国際ダイレクターの更新 野田
 11/25 南アの学校への手紙(佐々木)コピー郵送 野田
 11/30 ミーティング 久我 野田

12/1～2 ドウエドウェ学校訪問 平林

12/3 JICA 精算説明会 野田

12/5 ELETにてミーティング 平林

12/7 (特活)カラ=西アフリカ農村自立協会と DADA(ジンバブエ)報告会 野田

12/8 ELETにてクリスマスパーティー 平林

12/9 本を作業場へ運搬 渡辺英通

12/9-10 ELETにて本の整理 平林

12/11-17 ELETにてミーティング 平林

12/13 アフリカ日本協議会年末パーティー 野田 渡辺

12/16 段ボール50個搬出 北爪

12/19 住所ラベル用意 西村

12/19 ズバネ小ムソベ先生とミーティング 平林

12/20 マスコミに報告会案内をファックス 野田

12/20 日本経団連1%クラブへ登録確認 野田

12/21 TAAA 南ア事務所代表平林薫 一時帰国

12/23 梱包作業と忘年会 上林 野田 下谷 浅見

久我 米山 渡辺 平林 佐々木 丸岡 池上理麻子さん

12/22～25 年賀状 野田

12/29 朝日新聞さいたま総局より取材 平林 野田

1/7 JICA にて NGO 連携課と会議 平林 久我 野田

1/7 TAAA ミーティング 野田 平林 久我

1/9 朝日新聞埼玉版に TAAA の活動記事掲載される

1/10 会計事務 西村

1/11 TAAA 活動報告会・懇親会 さいたま市労働会館にて 講師 平林

1/13 報告会議事録まとめ 久我

1/14 報告会を HP へ掲載 武山

1/14 サンタ・マリアインターナショナルスクールへ本引き取り 浅見

(1/20 TAAA 南ア事務所代表平林、南アへ戻る)

ルイボスティのご紹介

ルイボスティ茶は南アの西ケープ州だけでとれます。赤ちゃんからお年寄りまで飲んでいただける健康茶です。

1箱 80パック 2000円(送料一律500円)
 (5箱以上 送料無料)

1パックでヤカン一杯のお茶が飲めます。

お申込みは、P12 の TAAA 連絡先へ

ルイボスティに同封する振込用紙で後からご送金ください。